

1人1台時代の

ICT活用

第10回

高校1人1台時代の 「ID管理」が現場に 与える影響

関根健一（エクスジェンネットワークス株式会社営業部）

1人1台、そして「1（ワン）ID」の時代へ

GIGAスクール構想の影響で、高校教育の現場にも1人1台の学習端末が普及しようとしています。「1人1台」に加え、2021（令和3）年の文部科学省「教育情報セキュリティポリシーに関するガイドライン」の第2回改訂では、「1人1台端末及びクラウドサービス活用を前提とした1人1ID化に対する新たなセキュリティ対策の追加」という項目が記載されました。

1人1台に「1ID」の文言が加わったわけです。「ID」

は例えるならば「鍵」のようなものです。校内の無線LANへつなぐ時、教材を使って授業を行う時、それぞれが自分自身だと認証できなければ開かないゲートがあると考えてみてください。そのゲートを開けるための「鍵」が「ID」です。個別IDにすることで生徒個々の学びを蓄積し、AIや教師からのフィードバックが得られやすくなり、質の高い教育につながるメリットがあるとされています。

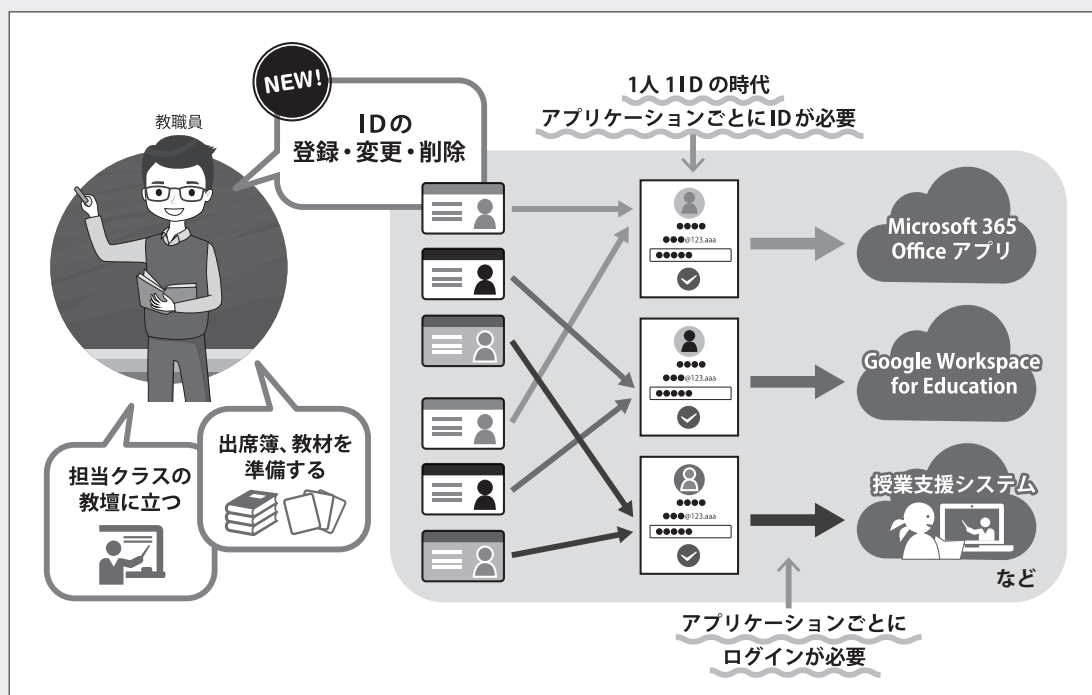
「1人1ID」が教育の現場に与える影響

文部科学省「『教育情報セキュリティポリシーガイドライン』の第2回改訂に関する説明資料」では、IDの登録・変更・削除について、次のように記載しています。

「（略）入学／転入、進級／進学、転出／卒業／退学時などのタイミングにおいて個々のID管理を行うことが必要となる（略）必要に応じて事業者へ運用を依頼することも想定して（略）運用面を踏まえた準備の必要性について整理」するべきとの指摘です。

つまり、ある特定の時期にIDに関する業務が集中し、誰かが生徒のID登録・変更・削除に関する業務を行わなければならないことを意味します。この業務を現場の教職員が担うとしたらどうでしょう。年度末の多忙な時期、新たな業務が発生することは現場にとって大きな負荷となることが考えられます。

実際に、ある自治体の校長会ではID管理が煩雑になり、



現場の教職員が困惑しているとして議題に上がるケースもあったと聞いています（図参照）。現場の教職員の仕事に、IDの登録・変更・削除の業務が新たに加わったことを表している）。

ID管理を効率化する選択肢を知っておく

年度末の多忙な時期、教職員は限られた時間をID管理に割くよりも、新年度の授業の準備などコア業務に集中したいと考えていることでしょう。そのために学校側に考えられる選択肢は、①外部委託する、②自治体等に対し、クラウド型のID管理製品（IDaaSなど）※を採用し現場の負荷軽減につながるよう依頼すること、などが考えられます。

例えば①外部委託の場合には、教職員の負荷を肩代わりしてもらえますが、委託業者などの手配や契約を学校側が行う場合には新たな負担となる可能性があります。

一方、②の具体例としては、群馬県教育委員会の事例が挙げられます。群馬県教育委員会では、登録作業の負荷を減らし学びの機会を増やすために、クラウド型のID管理製品を採用し運用の効率化に成功しています。

1人1台・そして1IDのメリットを享受するためにも、ID管理業務の負荷を軽減する策を今からでも検討しておくことをおすすめします。

※IDaaS（ID as a Service）：クラウド上で提供されるID管理サービス。シングルサインオンなどの機能も提供される製品もある。



（一社）ICT CONNECT 21 ―「教育の情報化」に関係する皆さまにオープンな場を提供し、コネクトすることで教育を良くしていく団体。教育とICTについての情報を毎週メルマガで配信中！